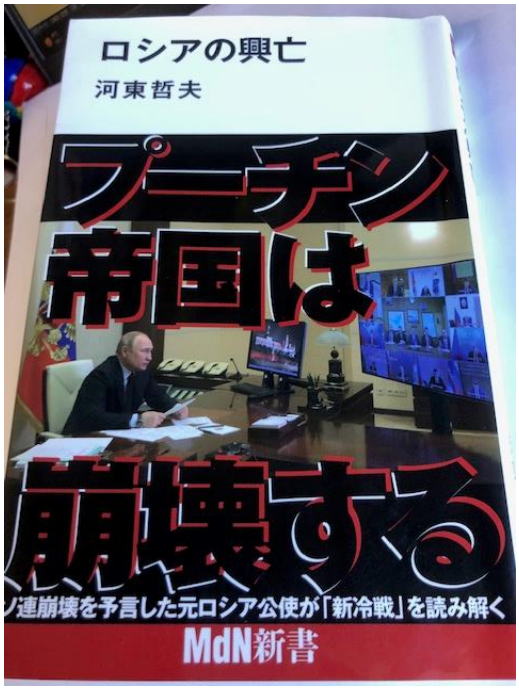
2022 年(下)　記憶に残る本

１，　　「ロシアの興亡　プーチン帝国は崩壊する」　河東哲夫著　（２０２２．６出版）



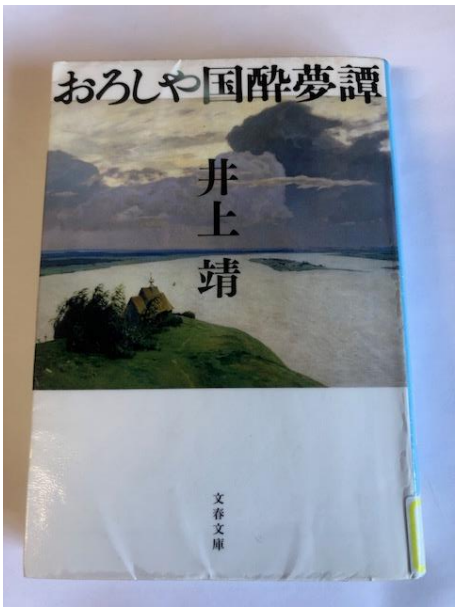
2022 年 2 月 24 日のロシアによるウクライナ侵略戦争（以下宇露戦争）以後、多くの学者・評論家・防衛省 OB の解説を YouTube で見たり聞いたりした。その中で河東氏は開戦当初からプーチン帝国の敗北を予言していた。そして 6 月にこの本を出版した。著者は豊富な外交経験（ロシア公使）とロシア大学での教鞭活動からロシアの国民性、社会構造、共産主義の本質を鋭く分析している。

ロシア人の民族差別意識が相当根強いそうだ。米国で黒人大領領が出たことでロシアの白人エリートの心情は複雑とのことだ。ロシア国内でもモスクワ周辺地域がロシアの中心でシベリア地域の関心は低いし蔑んでいる。

また 1950 年代一時的に共産主義計画経済政策が奏功したが、個人の自由で創造的な経営は定着せず腐敗汚職が蔓延した。この為 1970 年代以降は欧米資本主義国との経済競争に負けて 1991 年のソ連崩壊は必然だと説いている。

著者は「はじめに」で『ロシアは今、歴史の岐路にある。それはロシアという国と言うか、ロシアと呼ばれるこの広い地域が国家として、いや一つの文明のあり方として存続し得るのかという問題である。＜中略＞　ロシアは今、その瀬戸際にある。』と述べている。宇露戦争が始まって１０ケ月経過した。来年も混沌とした世界が続くことになるのだろうか。

２，「おろしや国酔夢譚」井上靖著（1974 年出版）「大黒屋光太夫　上・下」吉村昭著（2004 年）



2018 年と 2019 年にウラジオストクに旅行した。それを契機に日ロ関係改善に前向きな友人知人との集まり（湘南ロシア倶楽部）に参加している。大黒屋光太夫（以下光太夫）という名前は３年振りの総会で聞いた。そして光太夫は私と同県人（現三重県鈴鹿市白子生まれ）であることを知った。

さて酔夢譚の初版は 1968 年である。その後 1992 年に同名で映画化された。翌年の日本アカデミー賞で主演男優賞に緒形拳、助演男優賞に西田敏行が取った。そのあらすじは 1782 年 12 月に伊勢白子から出た千国船が遠州灘で遭難し８か月漂流してカムチャッカ半島東のアムチトカ島に漂着する。そこで数年滞在した後シベリアのイルクーツクに渡りそこで更に数年弱滞在し帰国嘆願書を３回出すが却下される。しかしロシア植物地理学者のキリロ・ラックスマンと親しくなり帝都ペテルブルグに赴きエカテリーナ二世（女帝）に直訴することになる。嘆願を巡る物語は漂流者の望郷の念と

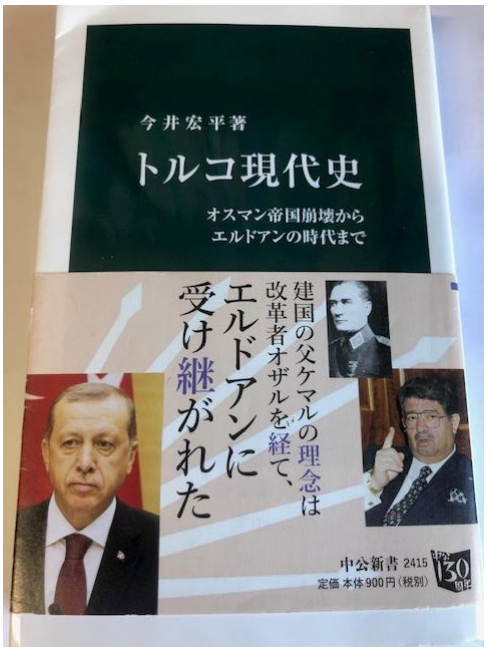
光太夫の不屈の精神で貫かれている。最終的にロシアの支援を受けて 1792 年日本に入るが、遭難時 17 人の船員で帰国成就したのは 3 人だけだった。しかも内 1 人は蝦夷にて病死するので翌年江戸に着いたのはたった 2 人だけだった。

光太夫と磯吉はロシアの政治経済文化慣習などの情報を江戸幕府に提供した。当時幕府は長崎出島のオランダからロシア情報を得ていたが非常に限られていた。門戸開放圧力を受けていた幕府（将軍家斉、老中松平定信）が 2 人の漂流者を丁重に扱ったのはそのような時代背景がある。２人は将軍家斉にも謁見し厚遇を受けて長命だった。

吉村著の「大黒屋光太夫」は井上著より 36 年後の出版だ。ロシア長期滞在模様と江戸帰還後の生活描写が詳しく生々しい。江戸に帰国後幕府の外国情報統制の為ロシア情報の開示は厳格に禁止された。しかし年を経つにつれ徐々に統制が緩和され、故郷の伊勢白子にも短期間滞在が許された。その期間に地元の知人や住職との会話録が残っていた。

そうした記録やその後の歴史的記録が吉村の小説には反映されているようだ。ロシア語を覚える工夫や風習の違いを克服したことなど苦難のエピソードは興味深い。肉食は禁じられていたが漂流者が病気に罹り仲間が無理やり肉を食べさせて生き延びさせている。オホーツクからイルクーツクまでの数千キロを極寒の中で疾走する情景は凄い。またエカテリーナ 2 世との謁見に至るロシア人（女帝からロシア一般人に至る）の暖かい対応や細かい気遣いには驚いた。

しかし山下恒夫著「大黒屋光太夫」（岩波新書 2004 年）を読むと、ロシアとしても日本人漂流者は貴重な財産だった。そうした認識は国の上から下々まであったようで、日本人漂流者は情報源であるだけでなく日本語教育復活に不可欠だった。光太夫の遭難時期は日露両国がお互いに相手国の情報に飢えていた時代であり、時代が異なれば彼らの扱いは異なっていたかもしれない。



３，「トルコ現代史」　2017 出版　今井宏平著

11 月 22 日から 30 日までイスタンブールとトルコの世界遺産を巡る旅に出た。8 月に申し込んでから出発までの３ケ月間ガイドブックと併せてこの本を読んだ。

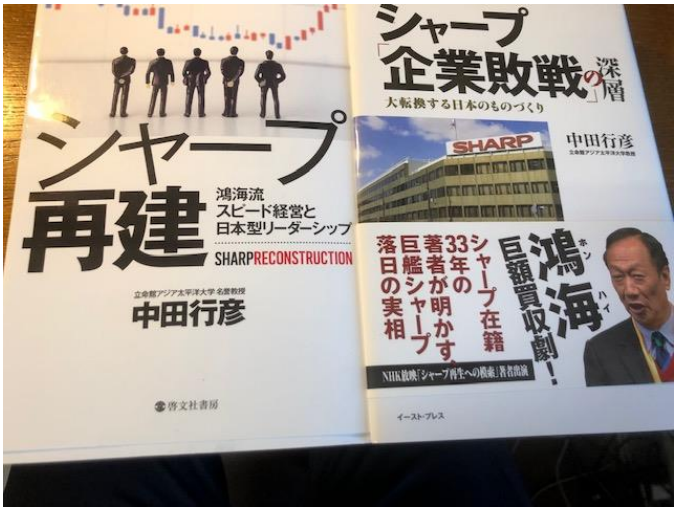
1923 年のトルコ独立から現在のエルドアン政権までの戦争と政治と経済と国民性についての概論だ。トルコは NATO 加盟国だが EU メンバーではない。そしてシリア難民をこの 20 年で累計５百万人受け入れている。現在イスラム教を９９％の国民が信仰しているがキリスト教など異教徒にも寛容だ。マレーシアやインドネシアと同様に日常生活で宗教的縛りがあまりきつくない。

また明治時代のトルコ船舶が和歌山県沖で難破したが、和歌山の漁民達が救援した史実を学校でも教えているという。旅行ガイドが話してくれた。この海難事故については 2015 年映画化されており、イラク戦争でテヘランに残された日本人２１５人の救援にトルコが救援したことも史実として国民に共有されている。

イスラム教はキリスト教が並ぶ巨大宗教だが、宗教と欧米の自由と民主主義という価値観のバランスを取りつつ独自の文化を試行錯誤しているのがトルコだと思った。来年 2023 年はトルコ建国１００年だ。

４，　　「シャープ再建」など中田行雄著

友人が今年シャープを退職してダイナブックの役員に異動した。ダイナブックは東芝の子会社であったが 2018 年にシャープが買収していた。ふと日本の有力家電企業が何故外国（韓国・中国・台湾など）に負けたのか知りたくなった。



今や日本に家電王国の面影は殆どない。家電のトップだったパナソニックは、サムソンや鴻海に売上も株式時価総額では遥かに及ばない。この３０年で家電業界の再編は銀行以上にドラマチックだ。日立と雌雄を争った東芝の現状は悲惨である。その理由をこの本はある程度教えてくれる。

著者はシャープ技術者で、退職後立命館大学教授となり学者として家電を通して物造りの構造変化と業界構造と日本的経営の在り方を分析している。なおシャープの経営危機は２度の投資戦略の失敗と説いている。それ以上に物造り工程の変化の指摘が大変興味深い。

日本企業の強みであった擦り合わせ製造技術から部品を組み合わせで完成する製造する仕組みに大きく変わったそうだ。日本は組み合わせ技術戦略に拘った。そして日本企業は一社で川上から川下までの一気通貫製造にこだわり巨大投資が出来なかったようだ。それは半導体製造業界でも同じく敗れる原因にもなったそうだ。

１２月下旬若手経営学者の岩尾俊兵氏の講演を聞いた。日本的経営の本質は「経営の民主化」だと説いていた。製造工場の現場労働者が、「カイゼン」のため生産ラインを一時的に止める権限をもつことが出来るのは日本企業だけだそうだ。経営学から日本製造業再生の産声を感じた。

ただ自動車業界はトヨタを先頭にＥＶという大変化に戦略的に上手く対応しているようだ。米国の自動車大手３社も一度倒産したが外国資本と提携して再生している。米国産業はＧＡＦＡなどの通信とコンピュウターソフト開発に産業の主役が変わりながら再生している。

産業の興亡は経営者と経営戦略に依存するという。過去の成功に溺れることなく環境変化に適応する戦略が経営者に求められることがよくわかる本だった。　　（2022, 12, 31 作成）